

## 活動報告書

報告者氏名：塩入隆志

所属：長野県稲荷山養護学校

記録日：2013年2月14日

### 【対象児（群）の情報】

・学年

高等部2学年

・障害名

広汎性発達障がい

・障害と困難の内容

日常会話において、自分の記憶している単語を断片的に発する傾向が1年のときから観られ、職員や、友人の間でコミュニケーションをとる際に不自由、不便さを感じているように観うけられた。また、その言葉を受けての周囲の反応も、対象生徒の発する言葉は理解が難しいせいなのか、他者とコミュニケーション不全の状態になることがしばしばあった。その原因は、発達障がいのある人の主障がいであるワーキングメモリー不全も少なからず関係しているのではないかと考え、それらを解決するためのひとつとして今回の学習をスタートさせた。

### 【活動目的】

・当初のねらい

だれにでもわかりやすい汎用性のあるコミュニケーションを少しずつ習得していくことで日常生活が楽しくなり、卒後の生活においても不自由さを感じることなく生活できるのではないかと考え、「汎用性のあるコミュニケーションの習得」をねらいとして設定した。

・実施期間

平成24年9月から現在まで 活動時間 6校時 課題別学習の15分間

・実施者

塩入隆志

・実施者と対象児の関係

学級担任

### 【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

書くことへの苦手意識があり、自信が持てない様子である。通常のプリントによる課題は、集中力が続かないことが多い。

・活動の具体的内容

生徒自身が週末の自宅での様子（友人、職員、家族とのかかわり、余暇利用、お手伝いなど）をiPadをつかい撮影する。撮影した映像を課題別学習の時間に確認し、そのあとに画像の内容を学習パートナー（今回は学級担任）に伝える、発表する。支援の方法として、映っている対象が人物である場合には“これはだれ”の文字をホワイトボードの上段に添付し、学習パートナーがiPadの画像を指さしする。そして、「これは誰？」と発問。事物の場合には“これはなに？”の文字を貼り、「これはなに？」と発問。何らかの作業をしているときには、“なにをしている”の文字を添付し、「何をして

いる？」と発問。生徒さんはそれに対する返事をホワイトボードに記入し、「〇〇さん」「〇〇です」「〇〇している」と返答する。生徒さんの返答に対して学習パートナーは、「そうだね」「正解」「すばらしい」などの賞賛や肯定的な言葉を返す。

・対象児（群）の事後の変化

学習を進めるなかで、コミュニケーションが汎用性のあるものになりつつある。生徒さんは寄宿舎を利用しているが、iPad をつかって学習していることは周りの生徒も職員も保護者の方も知っている。学級でも、朝の会や昼休み、帰りの会などで他の生徒も iPad を使用しているので、iPad が一学習教材としてだけでなく、人と人を繋ぐためのツールにもなっている。結果として iPad 自体が触媒となり、そこからコミュニケーションも生まれている。

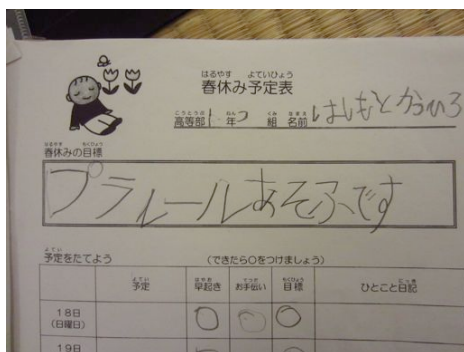
【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

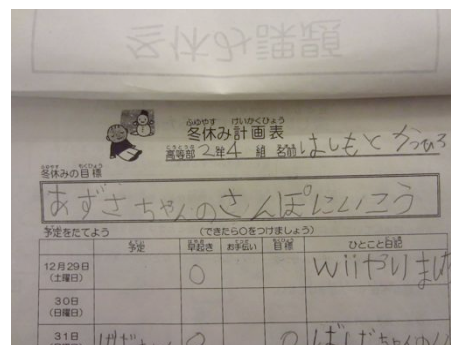
ひらがな、簡単な漢字の字が整ってきている。iPad を使った学習が、新しいことに挑戦しよう、やってみようというきっかけになっている。それが日常生活にも良い影響を与えている。

・エビデンス（具体的数値など）

24年度 4月 春休み帳



24年度 12月 冬休み帳



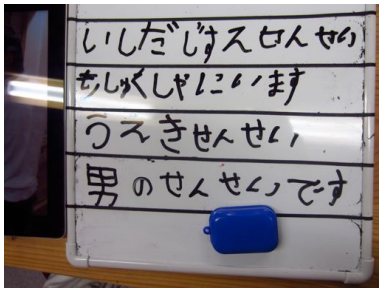
☆目標の部分であるが、春休み帳にくらべ、冬休み帳は字の形が整ってきた。内容も一人で完結するものから、周囲とかかわってする行動目標に変化している。

☆修学旅行 調べもの学習の様子（大阪城）

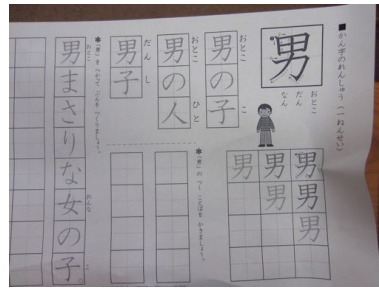
調べもの学習で、自分の書いた原稿を確認している様子。ひらがなだけでなく、漢字に対する抵抗もなくなり、むしろ、知らない漢字も書いてみたいという姿勢がところどころに表れるようになった。



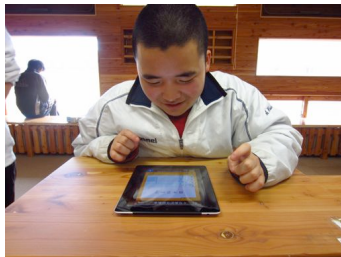
・その他エピソード（画像などを含めて）



課題別学習での記入例



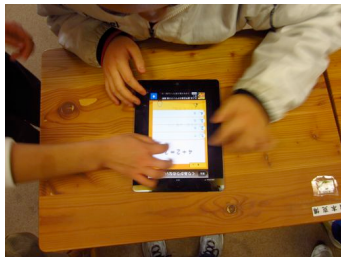
前日に使用したプリント



昼休みのようす（四則演算のアプリを使用中）



友達に関心を示す



友達からアドバイス

☆動画にも同じシーンを録画してあるが、前日の課題別学習でやり残したプリントが数枚あった。私がプリントを用意したのだが、ほかの職員にみていただく時間のものなので、なぜやらなかったのかという事の詳細は分からなかった。

時間が足りなかった、もしくは、漢字の意味自体がやや難しかったのかもしれないと思った。翌日のiPadの学習で、撮り貯めていた画像に寄宿舎の職員の写真があったので、授業でその画像を使用した。寄宿舎で男性職員が仕事をしている画像だったのだが、「この先生はだれですか？」の問いには「〇〇先生です。」と答えることができた。「〇〇先生は男の先生ですか？」と聞いてみると、「男です。」と答えることができた。その後、「あっ、漢字わかる！」とあって、やり残したプリントを取りに行き、ホワイトボードに記述した。あまりの反応の速さにこちらがびっくりしてしまったのだが、対象の生徒さんは、昨年（1年時）からプリント教材に対しては抵抗感があるのか、なかなか積極的に取り組むことが出来ないうでいた。

あくまでも仮説であるが、今回のケースは、“身近な職員の画像”“自分の知っている場所”“自分で足を運んで撮影したという事実”が手がかりとなって「男」という漢字の概念を理解する手助けになったのかもしれない。

「抽象的な言葉や解りにくい言葉を使うときには、具体的な行動が表れているときに表現する」という

セオリーがある。また、文脈の中で新しい言葉が出てきたときには、前後の習得済みの言葉との組み合わせで新しい言葉の意味、概念をイメージしようとする。

この生徒さんにとっては i pad を使用して得られた情報がそれにあたるのかもしれないと思った。絵や写真と漢字をマッチングさせる手法は定番になっている。ただ、その絵や写真が、「当事者にとってどれくらいのリアリティーがあるのか？」ということは当然ながら個人差がある。

少々昔の話であるが、“チェキ”というポラロイドカメラが流行ったことがあった。その後に携帯電話が普及し、写メがそれに続いた。「わかりやすい」「ポータブルである」「手早くレスポンスが得られる」「個性が内包されている」ということは言語の不足を補って余りあるメリットだ。表現手段を選択していく際に、それらのメリットに対して個人がコミットしていくことは自然なことだと思う。

自発や内発的動機の定義とはなんであろう？ということ時々考える。ある生物学者の言葉を借りると、「生物とは動的平衡を保とうとする存在である」らしい。自分なりに解釈すると、自ら動きながら快適な環境を求めてバランスを保とうとする・・・というような意味なのかなと思う。時代と共に選択肢や手法、用法というものは増えていき、社会的な認知や意味づけを待たずに、個人にフィットすれば、それを選択していくという生き方は、増加傾向にあるかもしれない。

学級内でも不定期ではあるが、気持ち日記にヒントを得て、写真日記というものを始めた。また、校外学習などでも map を利用して出発地、現在地、目的地の感覚をつかんだり、経由したポイントを撮影して振り返りの手がかりにしている。

予想される成果として、1、口語表現での困難な要素を補う表出手段だと発表者が感じることができそう。2、新しいやり方、表現をしてみたいという内的欲求を刺激するだろう。3、他の日記と同様に、自らの振り返り（自己理解）のツールにもなるだろう。4、互いに発表し合うことで他者理解にもなり、社会性を獲得していくだろう・・・などがある。

当初は、iPad を校外に持ち出した時にどんな使い方ができそうか？というところからスタートした iPad 活用実践であったが、あらためてツールとしての i pad の可能性を感じた。そして可能性に対する嗅覚は、正直に告白すると、生徒さんのほうが職員よりも鋭く、早かった。すばらしい事だと思う。